

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(2)

——『古今集』『春歌上』巻頭の三つの歌群の構造について——

今川 仁 視

前稿では、百人秀歌と「百人一首」の構造をどのように把握するかについての樋口・織田・林・西川の四氏の説の発展の跡を追跡した。

織田説は樋口説を深化させたものであり、その功績は、まず「百人一首」の百首の歌を相互につないでいる共通の語句を発見することによって、二つの歌集には原型があったことを明らかにした点にあり、林・西川両氏の説も、織田氏が発見された、共通の語句による歌の連鎖の本来のあり方を追求する中で生み出されていったものであった。

本稿では、織田氏が発見された、「百人一首」の歌の、共通の語句による歌の連鎖が、どの程度客観的な妥当性をもっているかを明らかにするため、「百人一首」に、他の勅撰集に比べ二四首と最も多く採られており、定家自身も親しむことの多かった『古今集』について、差し当たりその「巻第一 春歌上」巻頭の三つの歌群を取り挙げて検討し、この勅撰集の構造の一端を説明することにした。

織田氏は、その著『絢爛たる暗号——百人一首の謎を解く——』(前出)の中で、新井栄蔵氏の論文「古今和歌集四季の部の構造についての一考察」(『国語国文』一九七六年一月)の一部を援用し、『古今集』では、共通の語句による連鎖によって「各歌は対応し、歌集全体の目もあやな構造美をつくりあげている」と感想を述べられているが、本稿では、『古今集』の構造の、より全面的体系的な説明を試み「昭和の古今集研究の一つの記念碑」と評されている松田武夫氏の貴重な労作

『古今集の構造に関する研究』(以下、『構造』と略称)に見られる見解を参考にしながら、私なりの方法で検討を進めることにしたい。

歌の本文は、『構造』所載の「現存定家本中、最古写本の一つに数えられる島津家旧蔵藤原良経筆本」等(『構造』九頁)による。

一 「立春」の歌群(一—六)の構造

『古今集』は二〇巻から成っている。各巻は、大別すると春・夏・秋・冬の四季と賀、離別、騎旅、物名、恋、哀傷、雑、雑体、大歌所御歌の一〇の部に分かれている。このうち春歌の部は「巻第一 春歌上」と「巻第二 春歌下」の二巻から成っており、「巻第一 春歌上」の巻頭に次の六首が置かれている。歌の本文の引用に際しては、本文に付属している詞書と歌人名は、本稿の課題の検討には重要な意味をもたないので省略した。

一 年の内に春は来きにけりひととせを

こぞとやいはむことしとやいはむ

二 袖ひちてむすびし水の氷れるを春立つけふの風や解くらむ

三 春霞たてるやいづこみ吉野の吉野の山に雪は降りつつ

四 雪の内に春は来にけり鶯の水れる涙いまや解くらむ

五 梅が枝に来る鶯春かけて鳴けどもいまだ雪は降りつつ

六 春立てば花とや見らむ白雪のかかれる枝に鶯の鳴く

これらの歌は共通して、それぞれの本文の中に、次に示すように「立春」という歌の主題を示す語句を含んでいる。後の第三の歌群「鶯」を考察する際に指摘するように、個々の歌の主題を示す語句と「歌群の主題を示す語句」とは常に一致するわけではないが、この「立春」の歌群では、両者は一致している。

〔歌群の主題を示す語句〕

- 一 年の内に春は来にけり
- 二 春立つけふ
- 三 春霞たてるや
- 四 春は来にけり
- 五 春かけて
- 六 春立てば

歌群の構成は、当然のことながら歌群の編集過程の所産であり結果である。したがって一から六までの歌がすべて「立春」という主題を示す語句を含んでいるということは、紀貫之ら『古今集』の編者たちが、春歌の部の冒頭の歌群の編集に際して、数ある歌の中から「立春」という〔歌群の主題を示す語句〕を含んでいる歌を選んで集めたということ。歌群の編集には、先ず〔歌群の主題を示す語句〕を共通にもっている歌を、該当する歌群へ配当するという過程があったことを示唆している。

1 巻頭歌（一一二）

「春歌上」巻頭の二首について、『新釈古今和歌集 上巻』（松田武夫 風間書店。以下、『新釈 上』と略称）は、「構造の点から考えると、巻頭二首の作者が、共に、時間的基準において立春を捉えた点で、両者は緊密に提携しあっている。」（一五三頁）と指摘しているが、もっと具体的に言くと、両者は「年の内に春は来にけり」と「春立つけふ」

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（2）

という、この〔歌群の主題を示す共通の語句〕で互いに連鎖している。しかしこの二首は、このように共通の語句で互いに連鎖しながら「春歌上」の巻頭に置かれているだけでなく、「春歌下」の巻軸に置かれた二首とも、互いに共通の語句によって連鎖し呼応し合っている。この点については後で触れる。

2 「立春」の歌群の構造

『構造』では、一から六番までの六首が一括して「立春」の歌群とされているが、この区分の仕方はやや大雑把すぎる。先ほど、この六首の歌の本文から、この〔歌群の主題を示す語句〕を抽出して掲示したが、これらの語句を抽出した残りの本文をあらためて見直すと、そこに「降る雪」「鳴く鶯」「梅が枝」といった共通の語句を発見することができる。

〔歌群の主題を示す語句〕（その他の共通語句）

- | | |
|--------------|---------------|
| 一 年の内に春は来にけり | 水の氷れる |
| 二 春立つけふ | 雪は降りつつ |
| 三 春霞たてるや | 雪の内に 鶯 |
| 四 春は来にけり | 雪は降りつつ 鶯・鳴けども |
| 五 春かけて | 梅が枝 |
| 六 春立てば | 白雪 鶯の鳴く |

枝

これらの共通語句によって、歌群内部では、個々の歌は、形の面だけでなく意味内容の面でも、互いに連鎖することになる。五の「春かけて」については、この歌一首を前後の四と六との関連抜きに孤立的に取りあげると、①冬から春にかけて、とも解釈できるし、また②春を心にかけて、心に思って、とも解釈できる。

しかしこの歌群では、四と五は編者の手によって意識的に並列して

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(2)

配置され、二つの歌は、鶯という語で互いに連鎖させられている。したがってこの歌群の中では、五の鶯は、四の「雪の内に」すでに春が来ている時の鶯と同じ鶯であり、その鶯が、春を心にかけ、降る雪の中で、「春だ、春だ」と鳴いているのである。

『構造』では、鶯が「冬から立春の日にかけて鳴」いていることになっているが(一六一頁)、この解釈に従うと、五の鶯は、この「立春」の歌群の埒外に置かれてしまう。

ところで今見た六首の歌の関連を、さらに編集の手順という視点から見直してみるとどういうことになるだろうか。

① 「立春の日」という「歌群の主題を示す語句」を共通に持つ一と二との二首を選んで対にして小歌群を作る。

② 三の「雪はふりつつ」が、二の「水の氷れる」の縁語である点に着目し、すでに対にされた一と二の小歌群に付属させる。

③ 次に五と六が、「春かけて」―「春立てば」、「雪はふりつつ」―「白雪」、「鶯・鳴けども」―「鶯の鳴く」、「梅が枝」―「枝」という共通の語句をもっている点に着目し、この二首を対にして小歌群をつくる。

④ 四は、右の五・六と対比すると、「春は来にけり」、「雪のうち」に、「鶯」という共通の語句をもっているので、五・六の小歌群に付属させる。

ただしこの四の「鶯」は、五・六の場合のように、「梅が枝」に来て鳴いている鶯ではなくて、後に出てくる「鶯」の歌群の一四で、

鶯の谷より出づる声なくば春来ることをたれかしらまし

と詠まれている鶯と同じで、冬の間、谷にこもっている鶯である。以上の考察から次のことが分かる。この「立春」の歌群の編集過程には、先に見た、「歌群の主題を示す語句」をもった歌の配当という手続きに続いて、「歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」

による二首の歌の組合せという手続きがあり、この二首一对の歌が、「立春」という歌群を構成する単位になっている。

この二首一对の歌に、「歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」を共有する歌が付属して二つの小歌群が構成され、これらの小歌群が集って、「立春」という主題をもった一つの歌群が構成されているのである。

「立春」の歌群の構成を、まず歌番号で示すと次のようになる。

(一十二) + 三 + (四 + (五十六))

(一十二) + 三 + (四 + (五十六)) は「立春の日」の小歌群であり、これに三が付属している。

次の(四 + (五十六)) は、「立春」の「雪の中の鶯」の小歌群で、この三首の中で、特に雪の中で鳴く鶯を詠んだ(五十六)が、この小歌群の中心になっており、これに四が付属している。

ところで、現行の『古今集』では、「立春」の歌群の六首の歌は、

一 ↓ 二 ↓ 三 ↓ 四 ↓ 五 ↓ 六

の順に配列されている。しかし今見た歌の組合せという手続きからも明らかなように、右の配列順は、歌群の編集が始まる前から確定していたわけではない。

巻頭の二首にしても、歌の組合せの際の基準になった「歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」という二つの基準では、一 ↓ 二とは逆の、二 ↓ 一という配列も考えられないことはないもので、この二首の配列を最終的に確定することはできない。

さらに、二首の歌の配列が仮に(一 ↓ 二)と確定しても、次に、三を(一 ↓ 二)の二首の前に配列するのか、それとも後に配列するのかという問題の解決が必要になる。同じことは、(五 ↓ 六)の二首についても、さらに(五 ↓ 六)の二首と四についても言える。

要するに、現行の「立春」の歌群を編集するには、六首の歌の配当と組合わせだけでなく、さらに配列という手続きと、この配列のため

の新しい基準が必要になってくる。

では、歌群内部の歌の配列順を決める基準は、どのような条件を備えていなければならないだろうか。その第一は、歌群への歌の配当と、配当した歌の組合わせのための基準となった〔歌群の主題を示す語句〕と〔その他の共通語句〕以外の基準であること。第二は、そうした一連の語句の連鎖の出発点に、歌群の先頭に置かれた歌の主題に関する語句が置かれていること。第三は、個々の歌の語句が前の歌の語句と重複しない新しいものであり、したがってそれらをつないでいくと、一貫した一つの物語ができあがることである。

以上三つの条件を念頭に置きながら、「立春」の歌群の歌六首を読み返すと、それらの歌の中に、次のような一連の語句による歌の連鎖Ⅱ配列順を発見することができ、同時に、その一連の語句から、この歌群の編者の編集意図を読み取ることができる。

〔歌の配列順を示す一連の語句〕

一年の内に春は来きにけりひととせを

こぞとやいはむことしとやいはむ

二 袖ひぢてむすびし水の氷れるを

春立つけふの風や解くらむ

三 春霞たてるやいづこみ吉野の

吉野の山に雪は降りつつ

四 雪の内に春は来にけり鶯の

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（2）

氷れる涙いまや解くらむ

五 梅が枝に来るる鶯春かけて

鳴けどもいまだ雪は降りつつ

六 春立てば花とや見らむ白雪の

かかれる枝に鶯の鳴く

右の□で囲んだ一連の語句からは、次のような「立春」についての歌物語が浮かび上がってくる。

〔歌群の主旨〕

一 今年には旧年の内に立春がやってきた。

二 この冬凍っていたあの夏の水を、今日の立春の風はもう解かしたろうか。

三 （しかしまだ）吉野の山には雪が降り続けている。

四 （あの吉野の谷にいて）鶯の凍っている涙は、今はもう解けたらうか。

五 （あつ）「もう春だ春だ」と言うように、

六 白雪の降りかかった梅の枝で、鶯が鳴いているよ。

「立春」の六首のこのような配列順は、漢詩の絶句の配列基準である起承転結を想起させる。起―一。承―二。転―三・四。結―五・六。一は歌い起しで、この歌群の物語の出発点が提示されている。二を承け二で、この歌群の真の主題が示されている。三と四では視点を一転させ、物語の転換がおこなわれ、最後の五と六で、物語は結末を迎える。（『唐詩概説』小川環樹 岩波書店 一九五八年。一一五頁参照）最後の六は、次の「残雪」の歌群の最初の七と次の共通語句によつ

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(2)

て連鎖している。

春立てば・白雪―消えあへぬ雪。花とや見らむ―花と見ゆらむ

二 「残雪」の歌群(七―九)の構造

先の「立春」の歌群に続く「残雪」の歌群は、次の三首から成っている。

七 こころざし深く染めてしをりければ

消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

八 春の日の光にあたるわれなれど頭の雪となるぞわびしき

九 霞立ち木の芽も春の雪降れば花なき里も花ぞ散りける

先の「立春」の歌群で、白雪のかかった梅の枝で鳴いていた鶯はもとの谷に戻ったのか、この歌群にはいない。この歌群にいるのは、前の歌群で「白雪のかかれる枝に鶯の鳴く」のを聞いていたが、今は「春の日の光を浴びながら、部屋から、春雪の降った里を眺めている白髪の目立つ老人である。

七の「をり」は、この歌一首だけだと、「折り」とも「居り」とも採れる。しかしこの歌群の中では、次に示すように、七と八は、「消えあへぬ雪」―「頭の雪」という共通語句で連鎖しており、「消えあへぬ雪」を見ながら、自分の白い「頭の雪」を連想するという配列になっている。したがってここでは、七の「をり」は、「居り」と採るのが適当である。

『古今和歌集』(日本古典文学大系 8 佐伯梅友校注 一九五八年)では「折り」を採っているが(二〇六頁 頭注)、そうすると、『古今和歌集全評釈(上)』(片桐洋一 講談社 一九九八年。以下、『全評釈(上)』と略称)が指摘しているように、「花が咲いていない梅の枝を折った頃になって不自然であるうえに、たとえ風流の心から折ったとしても、折った後まで雪が『消えあへぬ』というのはおかし」(一

六五頁)く、歌群としても一貫した意味をもたなくなる。

〔歌群の主題を示す語句〕〔その他の共通語句〕

七 消えあへぬ雪 花 こころざし深く染めて

八 春の日の光・頭の雪 わびしき

九 春の雪降れば 花 花ぞ散りける

右の三首のうち、七と九はどちらも「雪を花に見立てる趣向」の歌であり、「消えあへぬ雪」―「春の雪降れば」、「花」―「花」という共通の語句で連鎖している。ところが「構造」は、「八は、「春の日の光」に、その日の天候と二条の後の恩沢を、又、「頭の雪」に、その時の雪降る状態と白髪の老齢を、それぞれ掛けた技巧的な表現であって、雪を花に見立てる趣向とは、傾向を異にしている。こうした趣向にすることする歌一首を、同類歌の真中に割りこませた形に」するということ組合せを、「同類歌の連続による単調さを避けようとする、撰者の意識のあらわれ」(二六四頁)と捉えている。

しかし七と八は、「消えあへぬ雪」―「頭の雪」、「こころざし深く染め」―「わびしき」と言う共通語句で連鎖しており、八の「頭の雪」も、この歌群の中では、全くの白髪ではなく、七の「消えあへぬ雪」を思わせるように、めっきり白髪が増えた状態を意味している。この歌群は、わずか三首であるが、先ほどまで庭先にいた鶯の去った後の静かな部屋で、春雪の里を眺めながら、老境へ向かう宮仕えの歌人が、自分の今の境遇を見つめている情景を味わい深く描いたものになっている。

〔歌の配列順を示す一連の語句〕

七 こころざし深く染めてしをりければ

八 春の日の光にあたるわれなれど

消えあへぬ雪の花と見ゆらむ

頭の雪となるぞわびしき

九 霞立ち木の芽も春の雪降れば

花なき里も花ぞ散りける

この歌群の配列は、起—七。転—八。結—九となっている。

〔歌群の主旨〕

七 消えきれずに残っている雪が花のように見えるが、

八 私の頭もあの残雪のように白い物がめっきり増えてしまった。

九 まだ花の咲かない里も、春の雪が花のように散っている。

唐詩の配列基準に照らせば、この歌群には承に該当する歌はなく、

起—七。転—八。結—九という配列になっている。

「立春の残雪」の歌群の最後の九と、次の「立春の鶯」の歌群の最初の一〇とは、次の共通語句で連鎖している。

春の雪—春やとき。花なき里—花や遅き。

三 「鶯」の歌群（一〇—一六）の構造

「鶯」の歌群は次の七首から成っている。

一〇 春やとき花や遅きと聞きわかぬ鶯だにも鳴かずもあるかな

一一 春来ぬと人はいへども鶯の鳴かぬ限りはあらじとぞ思ふ

一二 谷風に解くる氷のひまごとにうち出づる波や春の初花

一三 花の香を風のたよりにたぐへてぞ鶯ささふしるべにはやる

一四 鶯の谷より出づる声なくは春来ることをたれか知らまし

一五 春立てど花もにははぬ山里はものうかる音に鶯ぞ鳴く

一六 野べ近く家ゐしせれば鶯の鳴くなる声は朝な朝な聞く

先に見た「立春」の歌群で点景として詠まれていた鶯が、この歌群

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察（2）

では主役に躍り出てきている。

〔歌群の主題を示す語句〕 〔その他の共通語句〕

一〇 春やとき・鶯だにも鳴かず

一一 春来ぬ・鶯の鳴かぬ

一二 春の初花

一三 花の香・鶯

一四 春来る・鶯

一五 春立てど・鶯ぞ鳴く

一六 鶯の鳴くなる声

谷風

風

谷より出づる声

山里・ものうかる音

野べ近く

この歌群は、一〇・一一・一三・一四の「鳴く前の鶯」について詠んだ歌と、一五・一六の「鳴く鶯」について詠んだ歌から構成されており、全体として「鳴く前の鶯」から「鳴く鶯」へと、ほぼ自然の時間的推移につれて移動する編者の思いに仕掛けて配列されている。

問題は一二である。この歌だけは鶯という語を含んでおらず、「解氷」について詠んでいる。「解氷」について詠んだ歌が、何故、「鶯」の歌群に配列されているのか？

この問題について、『構造』では、一二の源当純の歌が採られた原典「寛平御時后宮歌合」の配列について考察した上で、「この当純の歌（一二）は、前二首（一〇・一一）の歌の時間的背景である初春を強調させるために、この位置に配列したものと想像される。（中略）」又、類似の歌が四首並列する単調さを破るために、その中央に、殊更配置したのかも知れない。（一七〇頁）等とされ、結局、一〇—一六の七首は、「鶯」を主題とする六首と「解氷」を主題とする一首とに区分されている。（一四四頁）

『古今和歌集』（新日本古典文学大系5 小島憲之・新井栄蔵校注 一九九五年）では、一〇・一一・一二の三首が「春の初め」の歌群に、一三・一四・一五・一六の四首が「鶯」の歌群に配列されたことになっている。（二三頁 脚注） また『全評釈（上）』では、一〇—一一の

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(2)

二首が「鶯を待つ」歌群、一二の一首が梅の「花をまつ」歌群、一三―一六の四首を「鶯」の歌群と、三つの歌群に区分されている。(三二―三八頁)

しかしこれまで繰り返し述べてきたように、歌群内部の歌の配列の問題を正しく解決するには、ある一首の歌だけを取り出し、その一首を、その前後の歌がもっている共通の語句を無視してあれこれ考察するのではなくて、この共通の語句による関連＝連鎖という視点から考察する必要がある。

まず一一と一二は、「春来ぬ」―「春の初花」、「鶯」―「谷風」という共通の語句で連鎖している。一二の「春の初花」は、この歌群の中では、ただ単に春に初めて咲く花ではなくて、一一とこれらの共通の語句によって関連づけられ、「春来ぬと人はいへども鶯の鳴かぬ」そういう春に初めて咲く花であり、同じく一二の「谷風」も、「鳴かぬ」鶯がまだ里におりて来ずにもっている「谷」から吹いて来る「風」なのである。

そこで次の一三は、そういう「風」＝「谷風」を使者として谷へ送り返し、「春の初花」ともいうべき「氷のひまごとにうち出づる波」の「花の香」を連れ添わせ道しるべにして、まだ谷に在る鶯を誘いだすことにしよう、という意味の歌になっているのである。

このように見えてくると、「鶯」の歌群の中で、この一二は、その前後の一と一三とよく溶け合い、この歌群の重要な構成要素になっていることが分かる。

〔歌の配列順を示す一連の語句〕

一〇 春やとき花や遅きと聞きわかむ

鶯だにも鳴かぬもあるかな

一一 春来ぬと人はいへども鶯の

鳴かぬ限りはあらじと思ふ

一二 谷風に解くる氷のひまごとに

うち出づる波や春の初花

一三 花の香を風のたよりにたぐへてぞ

鶯さそふしるべにはやる

一四 鶯の谷より出づる声なくは

春来ることをたれか知らまし

一五 春立てど花もにははぬ山里は

ものうかる音に鶯ぞ鳴く

一六 野べ近く家みしければ鶯の

鳴くなる声は朝な朝な聞く

この歌群の配列の要点は、起―一〇。承―一一。転―一二・一三・一四。結―一五・一六である。

〔歌群の主旨〕

一〇 春が早くすぎたのだろうか。鶯さえ、まだ鳴かないでいる。

一一 鳴かないうちは、春が来たのではないのだろうか。

一二 氷の隙間隙間に咲いているのは、春の初花か。

一三 あの花の香を、鶯を谷から誘い出す案内者にしよう。

一四 鶯が谷から出て鳴く声はまだ聞こえてこない。

一五 (あつ) 鶯が鳴いている。

一六 鳴き声は毎朝毎朝聞こえてくる。

この歌群は、起—一〇。承—一一。転—一二・一三・一四。結—一五・一六という配列になっている。

「立春」の歌群に、次の一七を先頭にした「若菜」の歌群が続く。

一七 春日野はけふはな焼きそ若草のつまもこもりわれもこもり

「立春」の歌群の末尾の一六と右の一七とは、次の共通語句で連鎖している。野べー春日野。朝な朝な—けふ。

四 「春歌」の巻頭歌と巻軸歌

「春歌」の部の巻頭歌一は、次の二と対になっている。

一 一年の内に春は来きにけりひととせを

こぞとやいはむことしとやいはむ

二 袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つけふの風や解くらむ

「春歌」の部の巻軸歌は一二三四で、その前の二三四と対になっている。

二三四 ぬれつつぞしひて折りつる年のうちに

春はいくかもあらじと思へば

一三四 今日のみと春を思はぬ時だにも立つことやすき花の蔭かは

右に掲げた巻頭歌と巻軸歌は、次の対照的な主題を示す語句で連鎖している。

〔歌群の主題を示す語句〕

〔その他の共通語句〕

一 一年の内に春は来きにけり

二三四 年の内に春はいくかもあらじ

二 春立つけふ

二三四 今日のみと春を思はぬ時だにも

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(2)

「春歌」の部の巻軸の二首一二三と一三四は、次の「夏歌」巻頭の

二首一三五と一三六と共通の語句によって連鎖し、この連鎖によって「春歌」の部と「夏歌」の部が連結されている。

こうした巻頭の二首と巻軸の二首の、共通の語句による連鎖と呼応の関係は、さらに「秋歌」「冬歌」の部にも受け継がれ、最後に、「冬歌」巻軸の二首と「春歌」巻頭の二首が連鎖し、日本の四季の循環に照応する形で、『古今集』の四季の部全体の骨格となっている。

三四一 昨日といひ今日と暮らしてあすか川

流れて早き月日なりけり

三四二 逝く年の惜しくもあるかなます鏡

見る影さへに暮れぬと思へば

一 一年の内に春は来きにけりひととせを

こぞとやいはむことしとやいはむ

二 袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つけふの風や解くらむ

〔歌群の主題を示す語句〕〔その他の共通語句〕

二三四 流れて早き月日

一 一年の内に春は来きにけり

こぞとやいはむことしとやいはむ

二三四 逝く年

二 春立つけふ

五 三つの歌群の編集方法

「春歌」巻頭の三つの歌群はいずれも三重構造になっている。

1. 歌群の個々の歌は、いずれも原則として「歌群の主題を示す語句」をもっている。

2. 歌群内部の歌は、「歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」による、二首一対を基本とするいくつかの小歌群を構成し

百人秀歌・「百人一首」の謎解明のための予備的考察(2)

ている。

3. さらに、歌群内部の歌は、すべて「配列順を決める一連の語句」によって連鎖し、歌群全体が一つの歌物語になっている。

歌群がこうした構造をもっているのは、歌群の編集過程が、部類と配当・組合せ・配列という四つの過程を経て編集されたからである。

(一) 部類と配当

「春歌」巻頭の「立春」「残雪」「鶯」の三つの歌群に含まれる歌一六首のうち、源当純の一二、紀友則の一三、大江千里の一四、在原棟梁の一五の四首で、これらいずれも八九三年(寛平五)九月二十五日以前の成立とされている「寛平御時后宮歌合」から採られている。

この歌合は、もとは春・夏・秋・冬・恋の五部各二〇番、合計一〇〇番、二〇〇首から成っていたと考えられている。原形全体を伝える文献は残っていないが、春の部は、二〇番四〇首がすべて揃っており、秋の部とともに、原初に近い姿を残しているとされている。

この歌合の当純以下四人の歌人の歌番号を、『古今集』の歌番号と対比すると次のようになる。

歌人		「寛平御時后宮歌合」		『古今集』	
当純	右方	二		一一二	
	左方	一		一一三	
友則	右方	二二		一四	
	左方	一七		一五	
千里	右方	一一			
	左方	一			
棟梁	右方	二二			
	左方	一七			

〔寛平御時后宮歌合〕の歌番号は、『平安朝歌合大成 増補新訂』萩谷朴 第一巻所収の類聚十卷本「〔寛平五年九月以前〕皇太子夫人班子女王歌合」によった。同朋舎出版 一九九五年。三四―三七頁。

「寛平御時后宮歌合」のような編集の素材に載っている春歌の中から個々の適当な歌を選び、『古今集』の春歌の各歌群へ集めるのが、実際の配当という手続きである。

配当の際の基準となるのは、個々の歌が共通してもっている主題を

示す語句であり、先の四首の場合、歌の中心になっている「鶯」の状態や動作を示す語句である。

ここで一言付言しておく、寛平御時后宮歌合の春歌では、「鶯」の歌四首はかなり散在している。ところが『古今集』では、これらの四首は、春歌の「鶯」の歌群一カ所に集められ、緻密に組み合わせられ整然と配列されている。

(二) 組合せ

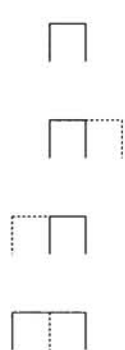
組合せの基本になっているのは、二首一对の組合せである。この手続きの基準になっているのは、「歌群の主題を示す語句」と「その他の他の共通語句」である。

しかし歌の中には、先に見た「鶯」の歌群の一二の当純の歌のように「歌群の主題を示す語句」を持っていないものもある。こうした場合、「その他の共通語句」が有効な基準となる。

個々の歌は、組合せの際、「歌群の主題を示す語句」と「その他の共通語句」によって連鎖させられる結果、歌の内容の面でも連鎖させられ、個々の歌がもともと持っていた意味が変化する。先に見た「立春」の歌群の五の「春かけて」や、次の「残雪」の歌群の七の「をり」の解釈が研究者によって異なるのも、また同じく「残雪」の歌群の八や一二の当純の歌が、それぞれの歌群の中で孤立しているように見えたり不釣り合いに思えたりするのも、歌群の内部での、共通の語句による連鎖の結果、個々の歌の意味内容が変容していることに気が付かないからである。

注 歌群内での歌の意味内容の変容については、『古今集』の編集方法を踏襲している『新古今集』の「巻第十一 恋歌」の一〇七―一〇八五の一五首についての『新古今和歌集の基礎的研究』(後藤重郎 塙書店 一九六八年。一一七―一八頁)の考察が示唆的である。

二首一对の組合せには、色々なバリエーションがある。先に考察した三つの歌群には次の四種類の基本的な組合せがあった。



『古今集』の歌群には大小さまざまなものがあるが、いずれも右の組合せが基本になっている。

(三) 配列

歌群に含まれている歌を、それぞれの歌がもっている語句でつなぐことによって物語を紡ぎ出し、歌群全体を最終的に歌物語に仕立てあげることが、歌を配列することである。

配列順を最初に示すのは、歌群の先頭の歌の主題であり、どの歌を歌群の先頭に据えるかによって、歌群全体の構成の大枠が決まる。

この配列基準のもとになったのは、唐詩の絶句の配列基準である起承転結ではなかったかと考えられる。詩全体の表現に変化に富んだものにできるかどうかは、「転」によるところが大きいといわれるが、先の三つの歌群の中で、これまで研究者を悩ませてきた歌に、八や一二のように「転」に相当する位置に配列されたものが含まれていることは興味深い。

『構造』が指摘しているように、「春歌」の部の歌群の区分の基礎になっているのは、「毎年繰り返される四季自然の移り変わり」であった。立春・残雪・鶯・若菜・鳥・帰雁・梅・桜・藤・山吹・逝く春という一連の歌群の主題がこのことを示している。

しかし、季節の推移が『古今集』の「春歌」の編集の基礎になっていることは確かであるが、だからといって、歌群内部の歌が、自然の推移という外在的な基準に即応して配列されていたわけではない。

配列に当たっては、自然の推移を念頭におきつつも、まず、個々の歌が持っている〔歌群の主題を示す語句〕と〔その他の共通語句〕お

よび〔配列順を示す一連の語句〕という、歌に内在する語句にしたがって配当と組合せを行い、次いで配列していったのである。

ところで、これら三つの基準のうち、「歌群の主題を示す語句」と〔その他の共通語句〕の二つは、個々の歌からこれらを摘出して併記すれば誰の目にも分かりやすい。編集作業としても簡単である。ところが〔配列を示す一連の語句〕という基準の存在は、歌群の編集という視点、すなわち歌群の編集手続きとその基準という視点を持たないかぎり分かりにくいし、この配列は編集作業の中では最も難しい。

『古今集』の歌群の歌の配列に基準が存在したことについては、この勅撰集の巻頭に置かれた「仮名序」の一節が一つの有力な証拠を提示していると考えられるので、次の号ではこの点について考察することにした。

〔参考文献〕—本文で引用したものを除く—

『古今和歌集成立論 研究編』久曾神昇 風間書房 一九六一年

『古今和歌集』日本文学研究資料叢書 日本文学研究資料刊行会編 有精堂出版

一九七六年

『寛平后宮歌合に関する研究』高野平 風間書房 一九七六年

『古今和歌集』新潮日本古典集成 奥村恒哉校注 新潮社 一九七八年

『古今和歌集(一)』全訳注 久曾神昇 講談社学術文庫 一九七九年

『古今集』和歌文学講座第四巻 勉誠社 一九九三年

(二〇〇四・一二・二〇 完)

(元東海女子高校教諭)